

# 「いのちの教育」の検討

杉山 緑

Life or Be Living Education

Ryoku Sugiyama

(Received October 1, 2004)

## I はじめに —問題意識—

本稿は、近年重視されてきた「いのちの教育」に焦点を当て、それも「死」を題材にした教育から「いのち（生）」へ迫ることの可能性を考察することを目的としている。

本年（2004年）6月、長崎県佐世保市で6年の女子児童が同級生をカッターナイフで刺殺するという事件が発生した。小学生の、しかも校内での事件であったため世間に大きな衝撃を与え、「こころの教育」あるいは「いのちの教育」の充実・徹底が叫ばれた。そして全国の学校現場にあっては、事件を受けてなにかの緊急の対応が迫られた。しかし、多くの教師たちには戸惑いや焦燥感のようなものが感じられる。つまり、自分たちの目の前にいる子どもたちに、今さら何を、どう教えていけばよいかわからないというのである。

「こころの教育」「いのちの教育」はこれまでも何らかのかたちで学校現場では取り組まれてきた。重大な少年少女の事件・事故（例をあげるなら、1994年に愛知で起こった「いじめを苦しめて」の自殺事件、あるいは神戸の中学生による児童殺傷事件など）が発生するたびに「もっと充実を」といわれてきた。さらに、平成10年（1998年）の中央教育審議会中間報告あるいは同年の学習指導要領改訂によって、「生きる力」を基盤とした「こころの教育」の強調によって、それは以前にもまして精力的に取り組まれてきたはずである。<sup>1)</sup> それにもかかわらず改めて「こころの教育」「いのちの教育」が声高に叫ばなければならないのはなぜであろうか。何が不足していたのだろうか。

これまでの「いのちの教育」と称されるものは、どちらかと言えば「生きることのすばらしさ」やその「尊さ、大切さ」等を情緒主義的・道徳主義的に考えさせようとする、言いかえれば、「生の」部分にのみ光を当ててきた傾向があると考えられる。そしてその対極にある「死」については考えさせたり、見つめさせる取り組みは弱かった。否、むしろ避けられてきたのではないかと思われる。「いのちの教育」＝「いのちを教える」ためには、「生」の対極に位置し、表裏一体のものとしてある「死」に何らかのかたちで真正面から向き合い、そこから「いのち（生）」を見つめ直す作業が重要なのではないのか。そのような視点から、本稿では「ニワトリを殺して食べる」という教育実践を題材に「いのちの教育」について考察したい。

## II 「死」を体験する実践の困難

2001年11月13日の朝日新聞朝刊に「殺して食べる 学習か残酷か」という見出しの記事が掲載された。秋田県の小学校（雄物川北小学校）の5年生クラスが「総合的な学習の時間」を先取りしたかたちでニワトリを飼育し、解体して食べるという授業を試みようとしたのだが、解

体直前になって保護者の中から批判の声が挙がり、中止に追い込まれたというものである。「(以前は)さばいて食べるのは普通だった。一つの勉強ではないか。」(カッコ内引用者)と、すべての保護者が批判的だというわけではなかったが、「教えることの内容は良いとしても、手段が間違っている。」といった批判に、町教育委員会もストップをかけた。校長は「保護者との意見交換が不十分だった。」としたものの「ただ今回のことは決してマイナスではなく、いいチャレンジだった。」というコメントを寄せている。担任は「2週間ほど前に、改めて父母に対して意見を求めた。反対なら意見を出してもらって一緒に考えたかった。」と述べており、いきなりの実践ではなさそうである。記事では子どもたちの意見も紹介されている。「最初から食べるために飼ったニワトリなので食べる。一生懸命育てたから食べる。」あるいは「夏休みも世話をして、エサをやってがんばったのに殺すなんて」と意見は分かれたようである。

実は、同様の試みがやはり周りの批判によって実現しなかった例がある。村井淳志が著書『いのちを食べる私たち』で紹介している兵庫県西宮市の小学校における太田光一の場合もそうであり、「子どものころに取り返しのつかない傷をつける。」「逆に『ニワトリをぶっ殺してスカッとした』みたいな感想がでてきたら、どうするんだ。」といった批判が保護者や同僚からも出され、断念したというのである。<sup>2)</sup>

「自分たちが飼育したニワトリを食べる」一かなり過激な内容ではある。それゆえ抵抗も大きい。もっとも心配されることは「可愛がって育てたいのちを自らの手で断ち、食べる」という行為が子どもたちにマイナスの影響を与えるのではないかということである。上述したように「こころを傷つけるのでは」「残酷さを植え付けるのでは」といった見解も、多くはそうした心配から出てくるものだ。ただし、それらは「そうなる可能性があると思われる」という程度であって、そのはつきりとした根拠はなく、意外と薄弱である場合も少なくない。だが、社会通念としてそのような捉え方は根強く存在する。他方、先の朝日の記事にもあるように、かつては「自分たちで飼育して食べる」ことは珍しくなかった。したがって、その経験のある人たちは上のような心配に対してはかなり楽観的であることが多い。(筆者もその一人である。)なぜなら、かつての経験が自分に大きな「こころの傷」や「残酷さ」をもたらしたとは実感していないからである。それゆえ両者の議論はしばしば平行線をたどることになる。はたしてどちらが妥当なのか。

これまでに「ニワトリを殺して食べる」という試みが全くなかったわけではない。関西学院中等部の海洋冒険キャンプでの取り組みもその一つである。このキャンプの様子は村井淳志の著書に詳しく紹介されている。<sup>3)</sup> 1997年ごろから続いているようである。また、後に本稿で検討するが、2001年5月には福岡県の久留米筑水高校でのニワトリを飼育して食べる実践が地元TV局の手によって放映されている。しかし、関学中等部や筑水高校の実践より以前、すでに1980年に一人の女性教師によって、しかも小学校4年生を対象とした「ニワトリを殺して食べる」実践が行われていた。鳥山敏子による試みである。<sup>4)</sup> 当時話題を呼び、その是非が論じられた貴重な先行実践である。そこでまず、鳥山実践を取り上げる。

### Ⅲ 挑戦としての鳥山実践

#### 1. 実践の概要

鳥山の実践が行われたのは1980年の10月末で、場所は東京郊外の昭島市・多摩川河川敷。参加者は、鳥山が担任を務める4年5組の学級児童及びその兄弟、保護者(母親)たちそして協力者を含め、総勢90名以上だったとされる。参加は自由であったが学級の大半の子が参加した

ようである。

最初、昭島市在住の中村博紀氏所有の田んぼに集合し、稲刈りを2時間した後、徒歩で20分ほどかけて多摩川河川敷へ移動している。そこで子どもたちはまず水遊びを楽しむ。その後、協力者から手に入れておいた22羽のニワトリを放ち、みんなで捕まえ、殺して捌く。そして大人たちの手によって準備されていたかまど・調理器具などを使って調理し、食べるという試みである。ちなみに、その日、参加者たちは朝から食べ物も水も口にしておらず、前夜から数えるとはほぼ半日は絶食状態であった。一時的にも飢餓的状态に置くという周到な手順が取られているが、鳥山自身が書いているように、この実践のポイントの1つと考えられる。飢餓状態であることで、その後続く「ニワトリを殺して捌く」残酷さやそれを行うことで発生する嫌悪感・罪悪感と、他方で、それを「食べる」という行為との間の隔たりが狭まると考えられるからである。

ニワトリが放たれてから後の様子は鳥山の著書『いのちに触れる』に詳しいのでそこに譲るが、男の子は（内心はともかくも）ある程度捕まえて殺すことに参加したようだが、女の子の中には殺すことを嫌がって泣き叫んだり、ニワトリを抱きしめたまま捌く場所から遠ざかっていたりする子などもいたようだ。最初に見本としてニワトリを処理したのは協力者の中村氏であり、嫌がる子どもを前にして鳥山が「よく見ていなさい」と強引に捌いて見せたことは記述してある。残りのニワトリを実際に絞めたのがどのような人たちであったかは記録ではわからない。それでも、ニワトリが殺された後、お湯に浸けて羽をむしる作業くらいからは多くの子どもたちが参加している。

鳥山によれば、当日ニワトリの肉を食べられなかった子がいた。偶然に翌日の給食でも鶏肉入りのシチューが出て、「食べられなかった」と報告した子もいた。後日書かれた子どもの感想文の中にも「残酷」とか「悲しい」といった言葉が登場する。かなりのショック体験であることはまちがいない。では、鳥山実践は子どもにどのような作用したのか。マイナスの影響を与えることになったのだろうか。このことを考察する前に、鳥山が上記のような取り組みに至った背景を見ておく。

## 2. 実践の背景

鳥山がこうした過激とも言える実践に至る過程において注目しておくべきと思われる重要な点が2つある。1つは、ニワトリ実践を含めた実践の積み重ね方の問題である。今1つは、その実践を展開する必然性であり、学級の子どもたちの実態であった。

まず、前者である。鳥山のニワトリ実践はある日、突然に思いついて実行されたものではない。9、10月には「東京大空襲」「広島・長崎の原爆」「日中戦争」などについての授業を行い、また、同時期に宮沢賢治の「よだかの星」の朗読などを行っている。これらの取り組みは、直接的にニワトリ実践と結びつけて展開されたわけではないと鳥山は書いているが、<sup>5)</sup> 実践後の子どもたちの感想文の中にはそれらと結びつけたものがある。実際は、鳥山のニワトリ実践は「戦争とか原爆とかをもっと深く考えさせたい」というところからも派生したものだったのである。<sup>6)</sup>

また、その後も鳥山は田島征三の『土の絵本』から、犬を殺して食べる場面が描かれた「庵で犬を」を題材とした取り組み、1月には『原発ジプシー』の著者・堀江邦夫を招いた授業などを展開する。子どもたちがニワトリとそれを殺す役とに分かれて演じ、ニワトリの側から死ぬこと・殺されることをイメージするというユニークな試みも行っている。つまりは、そう

した一連の実践の一コマとして位置づくものだったのであり、必然的なものだったのである。なぜなら、それらの取り組みはいずれも最後には何らかのかたちで「いのちとは」あるいは「生きることとは」といったテーマに行き着く。

紹介してきたような諸々の実践を生み出す根底にあるものの一つとして、少女時代にいとこが鶏を殺して料理し、自分もそれを食べたという鳥山自身の体験を記している。そしてその体験と結びつけながら、「小鳥や犬や猫をペットとして可愛がったり、すぐ『かわいそう』を口にして、すぐ涙を流す子どもたちが、他人が殺したのなら平気で食べ、食べきれないといって平気で食べものを捨てるということが、わたしには納得がいかない」という子どもたちの実態に対する危機感をも述べる。<sup>7)</sup> そのような危機感・思いが鳥山実践の原動力なのである。

だが、上のような子どもの実態以上にわれわれが考慮しなければならないことがある。第二の問題、すなわち、鳥山が実際に相手にしていた学級の子どもたち、固有名詞を持った子どもたちが抱えていた重たい現実である。かれらは様々なかたちでそれを教師・鳥山の眼前に曝け出していたのだ。幼いころに父親を亡くし、夜遅くまで働く母親との生活の中で、寂しさ・不安から他者への暴力や脅しあるいは物を与えるという形で他者とつながろうとする子、その子によって「登校拒否」へ追い込まれる子、学級に適応できず、孤立する子。鳥山はそうした子どもたちと向かい合い、文字通り体ごとぶつかり、その苦しみ・切なさ・やりきれなさに対応していかなければならなかった。つまり、子どもたちに現実を乗り越えさせるためにも前述のような取り組みが必要だったのである。子どもの現実に入り込み、変えていく教育・実践こそが鳥山のニワトリ実践のもう1つの意味だったのである。

### 3. 子どもたちへの影響

鳥山実践のインパクトに圧倒された村井は、実践の19年後となる1999年、当時の子どもたち、つまりは40歳手前となった、成人した鳥山学級の卒業生16名にインタビューをするという注目すべき試みを行っており、インタビューの内容とそこから帰結されることについて著書『「いのち」を食べる私たち』で報告している。<sup>8)</sup> それを見る限りでは、当時の子どもたちにとっては、やはり強烈な衝撃と印象を残す実践だったようである。そしてそれが彼らのその後の生き方にも大きな影響を及ぼしたことがうかがわれる。

ニワトリを殺して食べることは事前に知らされていたにも関わらず、それさえ思い出せない衝撃を受けたと述べる者、泣き叫んだりはしたが、実は、比較的冷静に客観的に見ていたと振り返る者など、当日及びその後の受け止め方は様々だったようである。また、ニワトリ実践に先立つ、あるいはその後続く授業・実践と絡ませながら反芻し、鳥山の意図を理解していった過程を語る者もいる。ただし、「こころの傷」を抱え込んだといった様子は見られない。後述するが、1人を除いてほとんどの卒業生がニワトリ実践を否定したり問題としてはおらず、むしろ鳥山の願ったものがその後のかれらの生き方に確かに根付いていったようにも思われる。もちろん、インタビューがほぼ20年後で子どもたちも大人になり、傷が癒えたあるいは冷静に見つめられるようになった時期だとすることもできるが、それでもマイナスの影響の痕跡は見つけにくい。

インタビューにおいて興味深いのは、女の子たちの間で「ここで泣かなくちゃ、非難される」といった意識が働いていたという幾人かの述懐である。ここはその年代の女の子特有の心理、世界・状況があったということになる。とはいえ、男の子の中にも逆の心理・意識が存在したということも当然推測される。ともかくこうした点は、実際の場面では表面上、わかりにくい

ものの1つである。現象だけで一面的に判断してはならないということであろう。

#### IV 久留米筑水高校の試み

さて、鳥山の実践では、殺されたニワトリは自分たちが育てたものではなかった。もう卵を産むことができなくなった廃鶏であり、食肉としての商品価値はほとんどない鶏たちである。その点で、先に紹介した秋田県の小学校のケースとは決定的に異なる。秋田の場合は、自分たちが飼育したニワトリだったのである。鳥山の実践でもかなりの批判・抵抗があったと予想されるが、「自分たちが一生懸命育てた」ニワトリを殺して食べるとなるといっそう大きな抵抗を生むことは明らかである。「育てて食べる」はどのように考えるべきなのか。可能なのか。

小・中学校で「育てる」ところから始めて「食べる」まで行き着いた実践を、残念ながら筆者は未だ知らない。村井が紹介する関西学院・中等部の場合でも、生徒たちが飼育するのは捌く前の2週間ほどである。しかし、高校における取り組みはある。福岡県・久留米筑水高校の実践である。高校の畜産系学科という性格上、単純に小・中学校の場合と同列に扱うことはできないが、一考に値する取り組みである。概要を紹介する。<sup>9)</sup>

##### 1. 実践及び放映内容の概略

久留米筑水高校の実践は、KBC九州朝日放送が最初ニュースで取り上げ、反響が大きかったことから2002年5月5日に「ニワトリからの贈りもの」と題して30分スペシャル番組として放送された。そしてさらに、5月25日には再編集され1時間番組として再放送されている。5月25日の放送ではニュースを見た人々から寄せられた意見が取り上げられ、高校生たちがそれについて討論する場面も放映された。意見は賛否両論だったようである。それに対する生徒たちの受け止め方は後述する。ちなみに、筑水高校では同実践を数年前から行っていたそうである。

筑水高校の場合、まさにヒナ（ひよこ）の段階から成鶏になるまで（2ヶ月ほど）2人で1羽を担当し育てる。成鶏になった時点で自ら捌いて調理して食べるのである。この実践を中心になって指導した高尾忠男教諭がこの取り組みを始めたのは、鳥山と同様に、生徒たちが食べ物を粗末にする、好き嫌いを言うといった状況に危機感を抱き、「いのち」の尊さ、その「いのち」の上にわれわれの「生」があるのだということを教えたかったというところからである。

飼育の様子は生徒たちに寄り添いつつ淡々と描かれる。学科の性格から家畜の世話をすることは特別なことではない。自分たちが育てたニワトリをいずれ屠殺し、食べることも当初からわかっている。しかし、実際に飼育していくにつれ、やはり情が移り、いわばペット化していく。1ヶ月ほどして、もはや「ひよこ」とは言えなくなった鶏たちを前にして生徒たちから「殺したくない」「今は（解体実習のことは）考えたくない」といった声が聞かれるようになる。愛情を込めて育てることといずれそれを殺すことになることとの間の矛盾・葛藤が示される。そのため高尾たちは、自分たちが行っている取り組みについて改めて考えさせる授業を行う。だが、その時でも生徒たちは納得できたわけではない。そのために解体実習前日になって数人の生徒は授業に出ることを拒否する。高尾たちは必死で説得するが「出る」という回答は得られないまま当日を迎える。結果的には、当日全員が出席することになるのだが、生徒たちが一晩何を考え、どのように葛藤したかはわからない。当日早朝に「眠れなかった」と言っただけで1人の女子生徒が涙ぐみながらパソコンを操作し、実習を待っている姿が紹介されている。おそらく他の生徒たちも同様であったのだろう。

いよいよ息の根を止める段階になると、女子生徒の多くが号泣し始める。しかし、高尾は表面的には冷静に説明しつつ、模範としてニワトリを殺す作業を進める。生徒たちが殺す番になって包丁を握ったままどうしても実行に移せない生徒に対しては手を取って「ニワトリの方がもっと恐怖を感じているのだ。一気にやる。ためらい傷はだめだ」と激励し、手を貸しながら実行させる。(実際に殺す場面は、視聴者のことを配慮して放映されていない。)

屠殺の後、解体処理する段階になってようやく生徒たちは落ち着きを取り戻し、作業を進められるようになる。笑顔も見られるようになる。解体処理が終わった直後、「やって良かったと思うか」というTV局スタッフの問いに対する二人の女子生徒の感想が紹介された。一人は「やって良かったと思う。いのちの大切さを感じた。育てていくことの大変さ、それを失った時の悲しさをすごく学んだような気がした。」と事態を肯定的・前向きに受け止めようとしていた。今一人は「ニワトリを殺したという罪の意識のほうが大きい。今はまだ(良かったとは)思えない。」と素直に話している。調理が終わり、食べる時には普通の食事風景に戻っている。屠殺の時に泣き叫んだ女子生徒がおかわりをする場面も登場する。

後日、かれらはこの取り組みについて寄せられた意見について考えることになる。そしてそれらもふまえてニワトリ実践に関する文集を作成する。

以上が、TVで紹介された内容である。

## 2. 寄せられた意見への生徒たちの反応

高校に寄せられた意見は50通ほど。賛否両論である。放送では否定的な見解の一つが紹介され、それに対する高校生たちの意見が発表される場面がある。

取り上げられた意見は、「鶏惨殺について」という見出しがついている。要約すると、育てた鶏を殺すことは残酷なことであり、さらにそれを泣いている生徒にやらせることはなお残酷である。生徒たちが泣いて殺すことを拒否している段階で十分であるとなぜ気づかないのか。殺すことは解体業に従事するようになってからでよい。「いのちの大切さ」を教えるというが、それを学ばなければならないのは先生たちだ、と結ばれる。

これに対して高尾とともにこの授業を指導した若い教師・富山恒司は「頭にきた人、手を挙げて。」と問題を投げかけた。画面で見ると全員が手を挙げた。ある女子生徒は「ニワトリに対しても、ニワトリを解体している人たちに対しても失礼で腹が立つ。」と述べる。「これを書いた人は心が狭すぎる。」と語る生徒もいた。全ての生徒が同意見なのかはわからない。もちろんTV局の番組制作方針なども関わってくるだろうから、このことだけで生徒たちの受け止め方、実践の影響を一般化することはできない。ただ、上記のように応えた生徒は、屠殺・解体の時に激しく泣きじゃくっていた生徒の一人であることは事実である。

また、後に文集にまとめられた生徒たちの声は様々だが、番組で紹介されている限りでは、自分たちの経験を真摯に受け止め、十分ではないが「尊いいのちを奪うこと」そしてその上に「自分たちの生があること」、さらに「自分たちが生きるといふことの意味」を理解しようとしている。紹介された一部を以下に記す。

「今回、命を奪ったことでいろんなことを学びました。自分がこれまで『いただきます』『ごちそうさま』という言葉の意味を知らずに過ごしてきたこと、命を断つことで命がはかなくなかったということ、そして業者の人たちは命を絶つことの怖さを感じながらも、生きていくために解体しているということ、いろんなことを考えた2ヶ月でした。」

「私たちは当たり前のように肉や魚を食べている。そして当たり前のように他の生き物の命を奪っている。『いただいている』というのは、人がきれいに飾った言葉で、本当は奪っているのだ。私たちは罪を犯しながら生きていく。その罪を忘れないこと、自分が生き物を殺していることを忘れずに生きていく。それが私たちにできることだと思いたい。私は生きていける幸せを学んだ。」

## V 2つの実践からの示唆

廃鶏と自分たちが飼育したニワトリ、小学校4年生と高校生といった違いはあるが、鳥山・筑水高校両実践から「ニワトリを殺して食べる」ことを通して「いのちの教育」を行うことの是非を問う貴重な示唆が多く得られる。以下、3点について言及する。

### 1. 体験の重さと確かさ

その1つは、両実践がともに「いのち」の大切さや尊さを観念的に捉えるのではなく、「他のいのちの上に自分たちの生がある」ことを子ども（生徒）たちが体で感じ、認識しようとしていることである。それが子ども・生徒たちのその後のものの見方・考え方、生き方に取り込まれていくと考えられることである。自分の手で1つの「いのち」を断つ。その行為がそれを余儀なくさせると言えまいか。鳥山学級の卒業生たちについてはすでに触れた。他方、筑水高校の場合はどうなのであろうか。

授業を受けた生徒たちが、その後、どのような生活を送ることになるのかは不明だが、番組ではかつてニワトリの授業を受けた卒業生（女性）が生まれたばかりの赤ん坊を連れて高尾を訪れるシーンが登場する。その卒業生は、「いのちが誕生したことをありがたいと思う」「犠牲があって新しいいのちがあると思う」と述べる。母親として、誕生した新しいいのち＝我が子の存在をニワトリによる「いのちの授業」と重ね合わせて「いのちの大事さ、いとおしさ」を捉えようとしている。高尾も「いのちをいただいて、また新しいいのちを産むわけだから」と語る。彼女と高尾はそのことを共有していたのである。そしてそれは、「自分で育て、自分の手でそのいのちを断つ」という体験を共にしたことゆえではないだろうか。

### 2. ペット化の問題

2つ目に、「飼育して食べる」実践でしばしば抵抗と困難を生み出す「ペット化」の問題である。雄物川北小の場合、ここが実践断念の大きなポイントだったと予想される。西宮市の太田の場合も同様であろう。それに対して久留米筑水高校の場合、授業の一環としての解体実習であるからペット化の問題をそのまま当てはめることはできないようにも思われる。したがって、その事例から小・中学校にも妥当するという結論の導き方にも無理があるかもしれない。しかし、すでに紹介したように、筑水高校の取り組みでもペット化現象が起こっている。しかも高尾は、「今年は例年以上に愛情が入りすぎている。」とも述べている。そのため過去数年間同じ実習を指導してきた高尾たちでさえ「今年はどうなることか」と悩み、心配する。結果は先に見たとおりだが、この問題をどのように考えるべきなのか。

鳥山の実践を卒業生へのインタビューも含めて検討した村井は、「自分たちが育て、殺して食べる」という実践スタイルには消極的な見解を述べる。<sup>10)</sup>

「固有名詞を持った動物を屠殺するのは、愛玩動物が出現する以前の社会に暮らす人々で

ある。いったん社会の中でペットというカテゴリーが成立したあとは、愛の対象として消費される動物と、食べる対象として消費される動物は峻別される。ペットとして飼育した動物を屠殺するというのは、動物とのかかわり方における異なった文脈を不自然に交錯させるものだ。」

このように述べ、「対象動物の区別という原則に反する」という理由でペットとして飼われた（あるいはペット化する）ニワトリではなく、廃鶏こそが妥当であるとする。ニワトリ実践ひいては「死」と向かい合わせる教育に対する村井の知見には共感できるところが多いのだが、筆者はこの見解に素直に同意することはできない。なぜなら、食べるために育てたニワトリがペット化していくことにより殺せなくなる、食べられなくなるというところにこそ根本的な矛盾・問題があると考えられるからだ。それを認めてよいのかということである。

鳥山にしろ筑水高校の高尾にしろ、「自分たちの生」と「他の（動物の）いのち」との間が乖離していることがニワトリ実践の動機の1つであることは間違いない。高校生の感想にもあるように、「他のいのちの犠牲」があつて「自分たちの生」があるということである。そしてそれは「生」と対極にありながら表裏一体の関係としてある「死」、動物ばかりでなく人間の「死」の意味を考えると分ちがたく結びつく問題である。村井自身もそうした「死」からの隔離・断絶への危機感がニワトリ実践の研究へ、そして鳥山や金森俊朗の実践へと向かわせた意味のことを記している。<sup>11)</sup>「死からの隔離を解除する」とも書いている。ならば、飼育したニワトリも認められてよいのではないか。今日の問題状況としては、「対象動物の区別」が現実にはできなくなってきたこと、逆に曖昧になってきていることのほうが大きいのではないのか。少なくとも、「食べる」ことを目的として「飼育する」ことは、そのような現実・曖昧さを許さなくなる行為である。その苦しく厳しい葛藤を実践者に迫るものであると考える。「他人の殺したものなら平気で食べ、残す」という子どもの現実から鳥山たちが感じたような矛盾と危機感は、飼育＝「ペット化」の危険性の推測により避けてしまうと却って増幅されることになるように思えてならない。

### 3. 「こころの傷」の問題

3つ目は、ニワトリ実践で必ず登場する「子どものこころに傷を残すのではないか」といった子どもへの心理的影響についてであり、最大の難問である。それが主観的・観念的であるにせよ善意からのものであるにせよ、誰しもが心配する問題である。この点について、ここでは近年注目されているトラウマあるいはそこから発生するとされる PTSD (Posttraumatic Stress Disorder、心的外傷後ストレス障害) と関連づけて考えたい。

トラウマ（心的外傷）の概念は研究の進展とともに変化・発展しており、現在一義的に定義することは難しいとされているようであるが、ここでは小西聖子が紹介するアメリカ精神医学会の『DSM-IV 精神疾患の診断・統計マニュアル』（1994年改訂）の定義に従うこととする。<sup>12)</sup>

『マニュアル』によれば「PTSDの診断基準」におけるトラウマの定義は、「実際にまたは危うく死ぬまたは重症を負うような出来事を、一度または数度、または自分または他人の身体の保全に迫る危険を、患者が体験し、目撃し、または直面した」<sup>13)</sup> 場合に発生する。そしてそれによって発生する持続的な心身の不調状況が「PTSD（心的外傷後ストレス障害）」である。そして、小西によれば、トラウマの定義には「できごとの質」と「体験する側の感情」の問題が含まれているという。加えて、今問題となっている PTSD はトラウマにより発生した心理

的障害、ASD (Acute Stress Disorder、急性ストレス障害) が2ヶ月以上持続して慢性化したときにそのように呼ばれるという。つまり、トラウマティックなできごとの後に、多く見られる一時的ストレスとは区別され、それが長期化したものである。<sup>14)</sup>

小西は、このようにトラウマ (及び PTSD) を説明した後、トラウマになる場合の特徴を6点ほどで説明している。<sup>14)</sup> その3点目に「起こっているできごとが非常に残酷なものであったり、グロテスクなものであったりする」場合を挙げている。また、4点目・6点目として「自分が愛している人やだいじにしている何かを失うこと」及び「そのできごとによって起こってくる結果に対して、実際に自分に責任があると思われたり、あるいは、主観的に責任があるとしても感じられたりすること」も挙げている。

なるほど、こうした点を考えていくと、ニワトリ実践はトラウマを抱える原因となる可能性はある。だが、ここで注目したいことは、小西が第1番目の特徴として挙げた点である。それは「最初にできごとが予測不能であること。これからどういうことが起こっていくか、このあとどうなっていくかがわからない」という点である。つまり、トラウマになるようなできごとは事前に予想不可能であり、それゆえ、以後もどうなるかわからないということが関係するのである。事実、PTSD が大きく話題になった阪神淡路大震災においても大阪教育大学附属池田小学校事件にしても、あるいは本年6月に起こった佐世保の「小学校6年女子児童による同級生刺殺事件」にしても、それを体験した人々はすべて災害・事件の発生は事前には予測できないものであった。したがって、その後についてもその時点では予測不能状態といってよい。このように考えると、ニワトリ実践は重要な特徴の1つには当てはまらない。なぜなら、ニワトリ実践は、すでに述べたように、周到な計画のもとに進められるべきものであり、「できごと」は当事者にとっては予測不能ではないからである。むしろ前もってそのことの心構えがある程度準備できるのである。むろん、そうは言っても当の子どもたちが肝心の場面で事態をどう受け止めるかは完全には推測できない。だが、鳥山実践でも筑水高校の実践でも、それによって子どもたち・生徒たちがトラウマを経験し、以後に重要な心理的障害を抱えたとは思えない。継続的に鶏肉 (あるいは肉全般) が食べられなくなったという事実もみつけにくい。強いショックはあっても一時的なものだったと考えられる。そうだとすれば、飼育によるペット化の問題がクリアできれば、「ニワトリを殺して食べる」という取り組みは、その手順・取り組みの前後の指導による十分な配慮があればトラウマ・PTSD の恐れは低くなり、その目的を十分に達成できる可能性はある。ただし、次のようなケースがあることには注意しておかなければならない。

村井のインタビューで紹介されている鳥山学級の卒業生で、唯一否定的な見解を述べたとされる牟田賢一のケースである。もともと鶏肉も鳥も嫌いで食べなかったという人物である。したがって、かれの場合だけは、その傾向にいつそう拍車がかかったとは言える。しかし、村井によれば、かれも他の肉は食べるという。ニワトリ実践が肉全般を食べられなくなるような結果をもたらしたわけではなかった。牟田のようなケースには配慮が必要だったということは村井の指摘するとおりであろう。<sup>16)</sup> ニワトリ実践は全ての子どもに強制することはできないということである。鳥山の場合も自由参加であった。筑水高校でも、解体実習前日に参加拒否をした生徒に対して、富山教諭は「どうしてもやらなければならないということではない。」と説明している。

## VI なぜ、今ニワトリ実践なのか

現在、われわれは動物に限らず人の「死」からも遠ざけられ、隔離されつつある。新聞やテレビでは、毎日のように戦争、災害や事故、犯罪などによる人の「死」が報道されている。ドラマやゲームにおいても人の「死」は頻繁に登場する。それらは、われわれの「死」に対する実感やリアリティを逆にマヒさせ失わせる。かつては臨終の席に立つことも多かった身近な人（祖父母、親・兄弟姉妹あるいは親類など）の「死」でさえ実感・リアリティの喪失の傾向がある。私的な経験だが、筆者の父親が亡くなった時、臨終に立ち会った。場所は病院の集中治療室であったが、幸いベッドの側で身内・親族と共に「死」を見届けた。前日から昏睡状態であったため、医療器具に囲まれた父は眠るように死んで行った。この時、居合わせた多くの人間は、医師の「ご臨終です。」という言葉によって「死」を受け入れた。だが、筆者の視線は医師の宣告前から父の死にゆく顔とそばに置いてある計器を見比べ続けていた。そして奇妙な違和感・非現実感を抱き続けていた。決して「死」を認めなかったわけではない。

現代医学の進歩により、延命技術は飛躍的に進歩した。「脳死」という厄介な問題もあって、「死」を宣告することは医師にとっても難しい問題とされる。いつ、私の父は「死んだ」のか。私の理解した限りでは、医師が宣告する30分以上前から心電図は直線を描いていた。心臓も呼吸も止まっていたのだ。「息を引き取る」という表現がある。心臓が停止し、呼吸が止まる。かつてはそれが「死」の瞬間であり、最期であった。今、病院で死ぬ場合、それは当てはまらない。筆者が感じた違和感・非現実感はそのから生じたと考えている。

「死」からの隔離・断絶やそこから生ずる実感・リアリティの不足が、「死」ばかりでなく「生」すなわち「生きること」「いのち」に対するわれわれの意識の希薄さをも生み出す原因の1つである。その意味で「死」と向き合わせることで、それも自分の手で「いのち」を奪い取る体験は大きな意味を持つ。体験者たちは「死」と「生」を捉え直し、それらに対する自己の意識の変革を迫られるからだ。「生き方」を考えざるをえなくなるからだ。鳥山や筑水高校の事例はそれを教えてくれているはずである。

現在、「いのちの教育」は様々なかたちで取り組まれている。そしてそれらは、従来の「教え込み型」の授業とは異なる側面を持っている。たとえば、妊婦や末期ガン患者を招いて「生きること」の意味を問いかける金森俊朗がいる。末期ガンの身を携えながら絵本を中心に「いのち」を教え続けた大瀬敏昭の実践がある。また、養護教諭という立場から「生と性」を総合的に捉え、実践していく岩辺京子らの試みがある。<sup>17)</sup> これらの実践は、単に「生きることのすばらしさや尊さ」を強調するばかりでなく、何らかのかたちで「死」を取り上げ、リアルに子どもたちに迫っていこうとする部分が含まれている。こうした試みの1つとして「ニワトリ実践」は位置づくと考えられる。

本稿は、「いのちの教育」の1つとして「ニワトリを育て、殺して食べる」というスタイルの実践の可能性を考えようとしたものである。もちろん検討すべき課題は山積している。子どもの発達段階への配慮の問題、ニワトリを飼育し始めてからの指導やニワトリ実践の前後をどのように関連させ組み立てていくかといった実践構想上の問題、万が一子どもにマイナスの影響を与えた場合のケアや保護者との連携をどうとっていくかといった問題等々、数え上げればたくさんある。本稿はそうした問題の追求の第一歩である。

[注]

- 1) 中間報告は、「生きる力」の核となる豊かな人間性として6点が挙げられ、その3番目に「生命を大切にし、人権を尊重する心などの基本的な倫理観」が示されている。倫理観という枠組みの中のみ矮小化されてしまう危険性を持つ扱い方である。
- 2) 村井淳志『「いのち」を食べる私たち』、教育史料出版会、2001年。
- 3) 村井、同上書、22ページ以下を参照のこと。
- 4) 鳥山敏子『いのちに触れる』、太郎次郎社、1985年。以下の鳥山実践の紹介は同書による。なお、この実践は、最初1982年に雑誌『ひと』誌上で数回に分けて掲載されている。
- 5) 鳥山、同上書、22ページ。
- 6) 鳥山、同上書、37ページ。
- 7) 鳥山、同上書、16ページ。
- 8) 村井、前出書、66ページ以下。
- 9) 以下で紹介する内容は、2002年5月25日に放映された1時間番組のものによる。なお、久留米筑水高校は現在5学科あり、そのうちの食品流通科が実践の舞台であると思われる。(同校、HPより)
- 10) 村井、前出書、14-15ページ。
- 11) 村井、同上書、「はじめに」を参照のこと。
- 12) 小西聖子『トラウマの心理学』、NHK出版、2000年。19ページ以下を参照。
- 13) 小西、同上書、19ページ。
- 14) 小西、同上書、31ページ。
- 15) 小西、同上書、21-22ページ。
- 16) 村井、前出書、82-83ページ。
- 17) たとえば、金森俊朗『性の授業 死の授業』、教育史料出版会、1996年。大瀬敏昭『輝け！いのちの授業』、小学館、2004年。岩辺京子『「総合」だからできる「生と性の学習」』、農文協、2004年など。